
それでも、僕は

夏生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それでも、僕は

【Zコード】

Z0471D

【作者名】

夏生

【あらすじ】

生きたい。……逝きたい。二つの想いが、交錯し僕を狂わす。

プロローグ

*

知らない間に、きっと何かを忘れてしまっていくんだろうな。

声にならない叫びは、喉を掠めて吐息となつて零れゆく。
複雑化したセカイの中。……答えはきっと、シンプルなはずなのに。

言葉にすることさえ出来ない「弱さ」を抱いて、僕は答えを探して彷徨つた。

色付いては消えていく景色を何度も越えて、何億・何千の中にある僕の“居場所”を探した。

ただ、君の愛が欲しいだけなのに。

悩んで、傷ついて、傷つけて……全てを失つて、何かを得て。

過ちを繰り返して、それでも僕は君を求め続けた。

現在の僕を支えるものは、過去の僕と君の存在。

僕がもし、

……命尽きる時には、隣で君だけ静かに微笑ついていて欲しい。

“ $362 \times 2 =$ タイムリミット”

僕のタイムリミットはあと、一年。

十六年間ずっと、動き続けていた僕の心臓はもう疲れきってしまつたらしい。

……だから、あと一年。あと一年間だけ頑張ると、僕に時間をくれた。

*

余命を宣告されたのは、今から半年前。
宣告、なんかじやなくて僕が聞いてしまったのが、始まり。

『「」両親には大変お辛いお話になりますが……』

僕の心臓は、もう一年も持たないこと。心臓移植の例。成功率。
日本での手術が困難なこと。治療費の額。

決して感情的な口調じやない、医師の話を聞く。 聞くんじや
なくて、その場から動けなくて、何もしなくても耳に入ってきた。

その時、思つた。

もう、終わりなんだなあって。

涙なんて出なかつた。涙より、恐怖の方が先だつた。
ガクガクと震えだす膝。壁に凭れかかつて、瞳を閉じる。僕に迫
つている、本当の闇はどんなものなのか、想像した。

「蓮、もつ少し入院が必要みたい。さつき、高松先生と話してきたの」

少し腫れた臉を躊躇すように、いつもより少し濃い化粧の母さん。さつきの話が夢じやないことを、僕に教えていた。

(「めん。……」「めんね。父さん、母さん）

子供が欲しくて、欲しくて。不妊治療までして、僕を生んで育ってくれたアナタ達に僕は、悲しみしか与えてあげられてない。

本当はもっと、笑顔や幸せを与えてあげたいのに。

(「めん……）

真っ白なシーツを握り締める。悔しさと、悲しさが入り混じった気持ちで僕は、母さんに笑顔を向けた。

「もうなんだ。……早く学校、行きたいな。心配かけて、『めんね。父さん、母さん』

父さんの瞳の奥が揺れる。母さんは「何言つてるのよ、学校なんかすぐに行けるわ」と咳くちづけ言つたあと、僕の視線から逃れるように林檎をむき始めた。

気が付いてるよ。

涙を堪えて震える肩。嗚咽を必死にかみ殺す、唇。

「心配するのが、親の役目だろ」

優しく父さんが笑う。田じりに皺が出来て、優しく笑う父さんの笑顔が好きだった。でも、今日の笑顔は瞳の奥に、涙を隠してた。僕が、そんな顔をさせた。

*

「また、明日来るから。ちゃんと寝るのよ？　あと、何かあつたらナースコールしてね」

消灯時間の十時を針がさす。

共働きの両親。ずっと病室に泊まり続けることが、許されないことを僕は知っていた。

何度も「暫くは、蓮と一緒に居ようかな」と、病室に泊まろうとする母さんを「大したことない病気なんだから、いいよ」と何度も、断つた。

名残惜しそうに、そして何処か心配そうな顔をして父さんと母さんは出て行つた。

なんで、今更。

「……………っく、ふえ……………ああ」

涙が、零れてくるんだろ？

遠ざかるゆつくりとした一人の足音を聞きながら、溢れてくる涙を拭う。

泣くな。
泣くな。
泣くな。

唇を噛んで、鳴虫を殺す。

……嗚呼。

一年後にはもう僕は、あの人の傍に居ない。

明日も朝が、来るのかな

自分の終わりを知つて、精一杯生きる人間と、自分の終わりを知らないで、何も知らないで死んで行く人間。

どちらが、幸せなんだろう？

残して逝く人と、
残される人。

いつたいどうちが、辛いんだろう？

*

「やつほーっ！ 見舞いに来てやつたぜ」

病室のドアが荒々しく開いて、やけにハイテンションな声が聞こえる。そこから顔を覗かせたのは、僕が学校でいつも一緒に居る北城だった。

我がもの顔で、ソファーに陣取つて座る。

僕はその様子を眺めながら、この光景が何回見られるんだろう？ と心の中で自問した。

「ありがと。……何、その顔」

それなりに整っている彼の顔の左頬は少し腫れていた。はははつと乾いた笑い方を彼はして、「美咲にやられちまつた」と自分の頬に触れた。

美咲は北城の彼女で、背が高いボニー・テールが似合う女子。活発で女らしくないサバサバした性格が、男女問わず人気があった。

「なんで？」

「いや、なんかね、うん。……まあ、気にしないで」
僕の肩をポンポンと叩きながら、北城は苦笑する。僕もつられて苦笑して「分かった」と彼の頬を見つめながら言った。

「つーか、俺より。大丈夫なの、蓮は」

一度、僕の右腕に繋がっている点滴の管を見つめた後、僕の顔を覗き込みながら、心配そうに呟いた。涙腺が緩む。目の奥がじわりと熱くなつた。

「ん？ 僕は、平気。もうすぐ、退院……出来るんだってさ」

心とはま逆の笑顔を作つて、彼を見つめる。暫く彼は、僕の瞳をじっと見つめた後、「そつか。じゃあ、また一緒にサッカーしような」と呟いた。

北城は暫く黙っていたが、「俺、そろそろ帰るわ」とソファーカラ立ち上がつた。僕はその様子を見つめて「うん」と頷く。
これ以上、北城と一緒に居てちゃんと笑える自信なんてどこにもなかつた。

「またな」

僕に優しい笑顔を向けて、ひらひらと手を振る。病室のドアノブを北城は、握つて静止した。そして、ゆっくりと……こちらに振り返る。

「また、来るから

去つていった北城の笑顔が歪んだ気がした。

それは僕の瞳を覆つてしまつた涙が原因なのか、北城の顔が本当に歪んだのか。

なあ、北城。

僕は何回、君と話せるだらうか。君と笑えるだらうか。
もし、一年しか僕が生きないと知つたら君は、どうするのかな。

夜、父さんと母さんが病室に来た。目の下にクマを作つてゐるのに、それでも明るく振舞つている両親を見て心が軋んだ。

「今日は、もういいから」と一人を追い出すように押し出して、ベッドに潜りこむ。足音が完全に遠ざかつたのを聞いてから、テレビをつけた。静肅は僕を追い詰めるから。

「蓮君。もう遅いから、寝ようね」

見回りにきた看護婦の高階さんに言われて、僕はテレビと電気を消した。「おやすみ」と高階さんは僕に言つて、病室から去つていく。

時計の音がやけに氣になつて、眠れない。

眠るのが怖い。

今まで当たり前に来ていた明日が、僕にはもう来ないかもしけない。

約束されていない明日が来ることを信じて、瞼を閉じる勇気なんて僕には無かつた。

瞼を閉じるのが怖い。

まだ、やりたいことがたくさんあるの。」

まだ、してないことがたくさんあるの！」

明日の朝も、僕はちゃんと生きていけるのかな。

空に近い、場所

受け入れるしかない。
受け入れるしかない、んだ。

いつの間にか寝ていたようで、目が覚めると空には太陽が昇っていた。自分の身体を確認する。右手を心臓の前にあてて、鼓動を確認した。

生きてる。

自分に朝が来ることが、自分が今、生きていることが、素直に嬉しかった。

生きていて、良かった。

病院の屋上へ向づ。病院の六階にある屋上まで、階段で昇った。息切れさせながら、ゆっくりと昇つていく。身体の体温は上昇して、心臓の鼓動が大きく聞こえる。自分が本当に今、生きているんだなあ、と実感した。

“立ち入り禁止”と張り紙がされているのを無視して、ドアノブをひねる。鍵がかかっていて、ドアは開かなかつた。

「屋上、入りたいの？」

後ろから声が聞こえた。振り向くと黒髪を肩くらいまで伸ばした、色白の少女が立っていた。

「……うん。空が、見たくて」

僕がそう答えると、少女は短いスカートのポケットから鍵を取り出す。そして、ドアにその鍵を入れて、右へ回した。力チャリ、

と音がしてドアが開く。

屋上は何も無い場所だった。

「メートルはあると思われる柵があるだけの、殺風景な場所。でも、病院では一番、空に近い場所だった。

「あたし、美羽。大塚 美羽って言うの。君は？」

ふわりと優しく微笑んで、彼女は僕の隣に腰を下ろした。僕は彼女を見つめながら、「僕は、片瀬 蓮」と答えて、屋上のコンクリートの床に寝そべった。空は青くて、白い雲が水彩のように見える。

「んー、じゃあ蓮君って呼ぶね。あたしは、美羽でいいよ。……蓮君はどうして、屋上で空を見たかったの？ 何処からでも、見上げれば空は見れるでしょ？」

美羽の問いかけに、僕は答えようか迷つたが暫くしてから口を開いた。 空をじっと見つめたまま。

「この病院の中では、此処が一番空に近い場所だから。天国に一番、近いかなあって思つて」

美羽は驚いたように、大きな目を見開いて僕を見つめている。大きな瞳は次第に潤んできて、美羽の頬に涙が伝つた。僕は驚いて、え？ と声を漏らす。

「なんで、泣いてるの？」

僕が尋ねると、美羽は「めんね」と呟く。口を押さえて嗚咽を堪えるような仕草を見せていた。長い睫毛は涙に濡れている。僕は思わず美羽の頬に手を伸ばした。美羽の頬を右手でそっと包むと、美羽は切なそうに顔を顰める。

空は何処までも広くかった。 手を伸ばしても、届かなくて。

「 大丈夫？ 泣きやんだ？」

美羽の顔を覗き込むと、美羽は苦笑しながらうん。と呟く。少し腫れた瞳をこぢらに向けて「ありがとう」と微笑した。

「 昨日ね、死んじやつたんだ。 あたしの、大好きな人」
心臓が大きく、飛び上がる。“死んじやつた”の言葉に身体が反応した。

シンジャツタンダ。

その言葉がゆっくりと、僕の身体に沈んでいった……。

最期に、笑えるよ！。

「……」「めん。僕、帰らないと」
視線を彼女に合わせるのが、精一杯だった。

……ちゃんとい、笑ってるかな。

震えそうになる声を必死で繕いながら、僕は彼女に微笑む。ギシ
ツと頸の骨が軋んだ気がした。

「あ、そっか！ そうだね、『ごめん』

彼女は慌てながら、僕に謝った。自分の右手に拳を作つて、彼女
は僕に差し出す。微笑む彼女から、受け取つたもの　彼女の体温
に少し温められた、この場所の鍵だった。

「ありがとう。でも、いいの？」

僕がそう聞くと、彼女は頷いて「友達の証！ 実はね、もう一個
持つてるの」と微笑んだ。僕はもう一度、ありがとうと彼女に告げ
て、逃げるように屋上から立ち去つた。心臓が、波打つ。

“お前はもう、駄目なんだよ”

違う。

“限界なんだよ、少し。休めよ”

そんなんじゃない。

“ビーセ、あと二年なんだ”

やめろ！

心に、誰かの声が響いてる。それに合わせるように、視界がぼや
けた。遠くに行つてしまいそうな意識を、必死で捕まえながら手す

りをつたつて、階段を下りる。

あと、もう少し。

もう少しで、病室に戻れるから……っ。

「……っ、はあ……っく

痛み出す心臓に手を当てて、額に滲む汗を拭う。
まだ、やつていないことがたくさん、あるのに……。
そこで、意識が途切れた。

『蓮』

何処からか、僕を呼ぶ声が聞こえた。

聞きなれた、低い声。

そう、これはきっと、北城の声。

僕ら一人だけが佇んでいる、真っ黒な世界。何も聞こえない、ただ“無”な場所。

「死んだのか、僕」

何も言わない北城は、僕が死んだことを肯定しているようだった。
「まだ、やりたいことがあるのにな」僕が、そう呟くと北城は悲しく微笑む。

『お前はその“やりたい事”を、やろうとしたのか?』

攻めるよつた口調では無いのに、北城の質問は僕の心中に深く突き刺さった。

やりたい事を、やろうとしたのか?

やりたい事があるのに。
しなきやいけないことがあるのに。
時間が無いつて分かっているのに。

黙りこむ僕を、北城はじつと見つめていた。暫くの沈黙が流れた後、北城は溜息を吐いて「まったく、マジでお前……手のかかるダチだよな」と微笑った。

『お前が無駄にした今日は 昨日死んだ誰かにとつては、大切な明日だつたんだ。現在は今、この瞬間にしか来ない。無駄にすんな、この時間を。この一日が一生を創るんだ。……がんばれよ』

*

北城の言葉が頭に響いていた。目が覚めて、一番に視界に入ったのは真っ白な天井。

ピッピッと定期的になる電子音と、すすり泣く母さんの声。僕が「母さん」と問いかけると、真っ赤な目をした母さんが「蓮!」と僕に抱きついた。母さんの、優しい香水の香りが鼻をくすぐった。

母さん。

……怖い。死ぬのが。自分が、独りぼっちになってしまふことが。
。

でも、怖いからって、いつまでもびびってたら、終わりが来るよね。

せつかく、“終わり”が分かっているんだから、その“終わり”までを精一杯、生きるべきだよね。

やりたい事、全部やって、しなきやいけないと、全部終わらせる。

最期に、笑えるように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0471d/>

それでも、僕は

2011年4月6日20時39分発行